

P2-6

大阪府内68施設のがん診療連携拠点病院等の 院内がん登録情報から見た症例区分及び病期と 治療法の違いによる治療開始までの日数 大阪国際がんセンター がん対策センター

福岡 史絵、森島 敏隆、原 加奈子、石田 理恵、川野 夏海、花原 聡、
島津 美寿季、井川 俊樹、栗原 佳宏、中田 佳世、宮代 勲

背景

がん診療において、診断から治療に至るまでには様々な検査や治療の確保、治療方針の決定等が行われている。
確定診断から治療開始までには一定の期間を要しており、様々な要因が考えられる。
そこで、院内がん登録データを用い、診断日から治療開始までにどの程度の期間を要しているのか算出した。

方法

【使用したデータ】

がん登録を基盤とするリアルワールドのがん医療への影響調査 (CanReCO)[※]
・2023年診断院内がん登録データ (参加施設：大阪府内のがん診療連携拠点病院等68施設)：90,968症例

※大阪府がん診療連携協議会 がん登録・情報提供部会が実施

【抽出条件】

(がん診療連携拠点病院等院内がん登録標準登録様式2016年版より)
・症例区分20 (自施設診断・自施設初回治療開始) および30 (他施設診断・自施設初回治療開始) を選択 (項目番号420より)
・診断日 = 起算日 (症例区分20は自施設診断日、症例区分30は当該腫瘍初診日) (項目番号380より)
・診断日から4ヶ月以内に施行 = 初回治療 (【がん治療、初回治療の定義】より)

【分類方法】

・最初に実施した初回治療を優先し、4つの治療群に分類
外科的治療および鏡視下治療 = 手術群 内視鏡治療 = 内視鏡群 放射線治療 = 放射線群 化学療法および内分泌療法 = 薬物群

⇒治療群別^{※1}と治療群別臨床病期別^{※1-3}に中央値を算出

※1 外科的治療 or 鏡視下治療 or 内視鏡治療の施行日 = 診断日の症例は除外
※2 ステージ「不明」と「該当せず」は除外
※3 放射線群と薬物群の症例区分30の0期は症例数が10件未満のため除外

結果

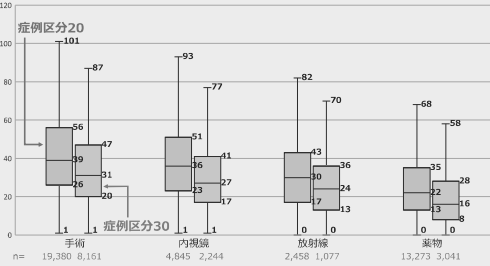
患者背景

	症例区分20	症例区分30
n	39,956	14,523
年齢 (平均(SD))	70.16(13.39)	66.8(14.42)
男性 (n(%))	22,099(55.3%)	7,068(48.7%)
胃 (n(%))	3,494(8.7%)	2,320(16.0%)
大腸 (n(%))	5,010(12.5%)	2,824(19.4%)
肝・肝内胆管(n(%))	1,002(2.5%)	255(1.8%)
肺 (n(%))	5,547(13.9%)	719(5.0%)
乳房 (n(%))	4,727(11.8%)	2,156(14.8%)
その他 (n(%))	20,176(50.5%)	6,249(43.0%)

治療群別

●どの治療法においても、症例区分20に比べて症例区分30の方が治療開始までの期間が短い (6~9日)

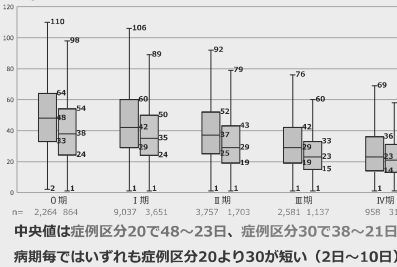
診断から初回治療開始までの日数 (症例区分20: n=39,956、症例区分30: n=14,523)



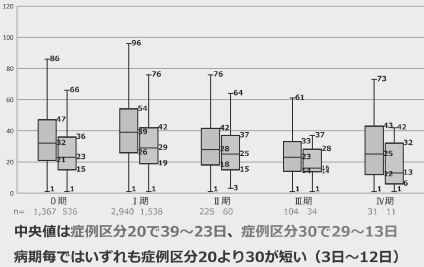
治療群別×臨床病期別

●治療法・症例区分に関わらず、概ね、臨床病期が進行するに伴い治療開始までの期間が短い
●症例区分20に比べて症例区分30の方が治療開始までの期間が短い (1~14日)

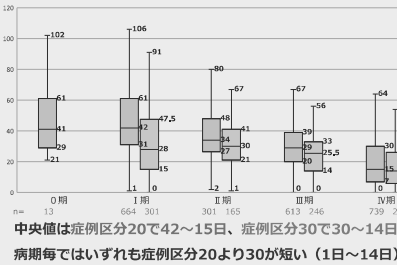
手術群の日数



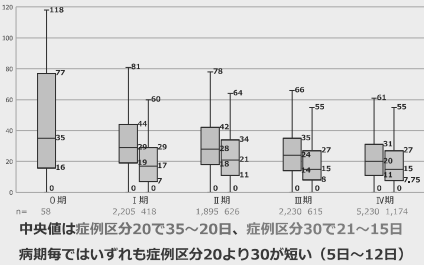
内視鏡群の日数



放射線群の日数



薬物群の日数



結語

症例区分20より症例区分30の方が治療開始までの期間が短くなる理由は、症例区分20では治療までの間に必要な検査を全て実施する必要があり、かつ手術室等の待ち状況等も影響するため治療までに期間を要すること、症例区分30では紹介されてきた時点で治療内容がある程度決まっている場合や、手術室等の待ち状況や入院調整を考慮した上で受け入れている場合があることが考えられる。

臨床病期別では、臨床病期が悪くなるにつれて患者の自覚症状の出現等で早期の治療が必要と判断されている可能性が考えられる。

なお、院内がん登録では患者が最初に医療機関を受診した時点から治療開始に至るまでの一連の経過を把握できないため、実際の「治療開始までに要する期間」について厳密に評価することはできていない。

